

弘前れんが倉庫美術館

所在地：青森県弘前市吉野町2-1

竣工年：1923年

改修年：2020年

用途：[改修前] 倉庫
[改修後] 美術館

建物所有者：弘前市、弘前芸術創造株式会社（建築主）

改修設計者：Atelier Tsuyoshi Tane Architects株式会社（建築設計）、
株式会社 NTTファシリティーズ（設計統括）、株式会社 NTTファシリティーズ東北（設計統括）、
株式会社 大林組（構造設計）、スターツCAM株式会社（構造設計）、
株式会社 森村設計（設備設計）

改修施工者：スターツCAM株式会社（建築）、株式会社 大林組（建築）、株式会社 南建設（建築）、
株式会社 ユアテック（設備）、株式会社 リケ（煉瓦工事）、
株式会社 高山煉瓦建築デザイン（煉瓦工事）

弘前れんが倉庫美術館は、明治時代に実業家福島藤助が建設し、その後シードル工場として活用された築約100年の煉瓦倉庫を美術館にコンバージョンしたものである。その運営と維持管理を15年間の長期にわたって行うコンバージョン型PFI事業となっている。

スタジオ、市民ギャラリー、ライブラリーを併設した、市民に開かれた美術館のエントランスには、弘前市出身の奈良美智氏作のメモリアルドッグが設置され、新たに構築された煉瓦アーチトンネルとともに、印象的な「ウェルカム・ゾーン」を作っている。煉瓦壁を内外に現し、既存の開口部を巧みに活かすことで、自然光の入り、明るい共用空間となっていることに好感が持てる。

外観は保存復元を原則としているが、ペディメント部を白壁から煉瓦積に改修し、屋根をシードル工場にちなんだシードルゴルドのチタン葺きの屋根とすることで色合いに変化が生まれ、整備されたランドスケープ・芝生広場とともに、近代化産業遺産としてのたたずまいに彩りを添えている。

煉瓦壁の補強は外観を保存すべく頂部からPC鋼棒を約1m間隔で挿入し、基礎に固定端、頂部に緊張端を設けてプレストレスを導入している。穿孔とPC鋼棒の間にはグラウト材を充填しているが、PC鋼棒まわりにグラウトジャケットを装着し漏出を防止するなど、煉瓦壁の美観を損ねないディテールが採用されている。

吹抜空間に面する煉瓦壁には密にPC鋼棒を配置・頂部には鉄骨梁を流し、面外方向への補強を行っている。このような手法により、外観も内観も煉瓦を現しとした空間が耐震性能を担保しつつ成立している。

煉瓦壁以外の木造小屋組、鉄骨部材、床コンクリートなどの既存部材についても、経年による劣化や腐食の程度を確認しながら残置、再利用、転用など活用を行っている。

PFI事業であるため、総事業費、設計や施工に関する要件が業務要求水準書によって決まっていたこと、美術館の運営部分を利用料金で賄うこと等の大きな制約を考えると、通常の建物の改修・運営よりも難易度が高いプロジェクトである。そうした制約の中でも内部の結露を防ぐ配慮をしつつ経済性と省エネの両立が実現されている。室外機を黒板塀で取り囲むという景観に対する配慮を行っている点、収蔵庫の温湿度管理グレードを適切に設定し管理している点など、美術館ならではの創意工夫も随所にみられることも評価に値する。PFI事業の終わる時期に大規模修繕が計画されており、「記憶の継承」という美術館のコンセプトの真価が再び問われるであろうが、現地審査時にも未来の弘前を担う学生・生徒が集い・学ぶ姿をみかけ、人から人へ、場の記憶は継承されていくことが実感された。